新生児外科疾患の出生前診断

島田信宏，川内博人（北里大学産婦人科）

新生児外科の診断対象となる疾患は，極めて多岐にわたっている。小児外科学の進歩はめざましく，必ずしもすべての疾患に対する早期手術が必要なわけではない。しかし，疾患の存在が可及的早期に知られていることがより望ましいことは今日でも変わりはなく，ここに出生前診断の一つの意義があるといえる。

従来の胎児異常の出生前診断は，X線診断（羊水胎児造影）により行なわれていた。1973年以来，1985年までの間に北里大学病院では65例に羊水胎児造影を施行した。(表1)

表1　羊水胎児造影の適応

	胎児輸血	奇形診断	計
1973年	1	10	11
74	1	4	5
75	2	9	11
76		2	2
77		8	8
78		5	5
89		13	13
80	1	4	5
81	1	1	2
82	1	1	2
83		0	0
84		0	0
85		1	1
	7 (10.8%)	58 (89.2%)	65

その適応は表に示す如く，胎児輸血の前処置として行なわれたものが7例で，58例(89.2％)は，羊水過多，子宮内胎児発育遅延などのため，胎児異常を診断する目的で施行した。

表2に羊水胎児造影により診断された胎児奇型を示す。58例中，33例，56.9％に種々の異常が認められた。このうち，出生前診断にひき続き，生後外科的処置を施したのは4例で，消化管閉鎖の1例が術後生存している。

表 2　羊水胎児造影で診断された胎児奇形

内臓脱出	3→2例臍帯ヘルニアope後死亡 1例腹壁破裂　出生直後死亡　(多発奇形)
食道閉鎖	1→出生時死亡（多発奇形）
腸管拡大	1→ileus ope→生存
殿部奇形腫	1→生後 ope→死亡
小顎症	3→2例 Treacher Collins 1例 Goldenhar
水頭症	2
小頭症	2
生存不可能な奇形	20
計	33/58 (56.9%)

表 3　最近の治療可能な新生児外科的疾患例の出生前診断

	疾　患　名	Ope 日齢	出生前診断
1977年	meningomyelocele	0	
	omphalocele	1	
	十二指腸閉鎖	4	
1978年	TEF	0	
	小腸閉鎖	2	
	TEF	1	34 W Amniofeto-graphy
1979年	十二指腸閉鎖	1	34 W Echo
1980年	cystic hygroma	2	
1982年	TEF	0	
	横隔膜ヘルニア	0	
1983年	omphalocele	1	
	十二指腸閉鎖	1	34 W Echo
	omphalocele	0	
	hydrophrosis	17	27 W Echo
1984年	omphalocele	1	
	十二指腸狭窄	7	
	十二指腸閉鎖	1	33 W Echo
	Malrotation	3	
	横隔膜ヘルニア	1	
	(Malrotation 十二指腸狭窄	4	
	Malrotation	3	
	Malrotation	3	
	TEF	1	
	TEF	1	32 W Echo
	空腸閉鎖	2	38 W Echo
	計　25例		7例 (28%)

さて，1979年以後は超音波断層法が産科領域で繁用されるようになり，出生前診断に大きな役割を果している。表3に1977年以後に当院で出生した，外科的治療が可能だった症例と，その出生前診断の有無，診断方法を示す。

1979年からは羊水胎児造影による診断例は1例も無く，すべて超音波断層法により診断されている。ことに消化管異常の診断には，その有用性が発揮されている。

このように，羊水胎児造影の周産期医学の発展上の功績は大きいが，種々の副作用を有すること，今日では，羊水胎児造影により診断されるすべての胎児の異常は超音波断層法により侵襲無く診断可能であることから，羊水胎児造影の臨床検査としての価値は失ったといえよう。

先天性食道閉鎖については，超音波断層法により，その疑いを持つことで，出生前診断の役割は十分果していると考えられ，羊水胎児造影を施行する必要は無いと思われる。

また，Bockdalek hernia と congenital cystic adenomatoid malformation との鑑別については，出生前に超音波断層法により Bochdalek hernia が疑われた場合には，出生後の CCAM を念頭においた注意深い診断により，十分可能であると期待される。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

新生児外科の診断対象となる疾患は,極めて多岐にわたっている。小児外科学の進歩はめざましく,必ずしもすべての疾患に対する早期手術が必要なわけではない。しかし,疾患の存在が可及的早期に知られていることがより望ましいことは今日でも変わりはなく,ここに出生前診断の一つの意義があるといえる。